

題名の通り、「事業仕分け」。平成 22 年 4 月 25 日から第 2 回目が始まっている。この件は、エッセイとして一度「水倶楽部だより」で発表しているが、その内容を再度推敲し、私の所感を述べさせて頂く。

まず、今回の事業仕分けで少し残念な事がある。第 1 回目の事業仕分けで、猛烈に張り切った仕分け人の蓮舫氏が、なんだか途中笑みを浮かべるようなソフトな路線に変更してしまった事だ。

私としては、蓮舫氏は第 1 回目のまま、必殺！（とつく位の）仕分け人という感じの方が良かった。まあこの件は、事業仕分けの内容には、全く関係の無いことだけれど。

さて、下水道事業関連の事業仕分けに関しては、第 1 回目の時に行われたが、その中で、本当に、「下水道事業の素人が、自分の意見で勝手にかき回して、余計混乱させた」と言うのが、私の第一印象。なぜなら、「財源を地方に移し、自治体に汚水処理手法の判断を任せる。」って自治体の人が本当にその場所で必要とされる汚水処理手法を判断出来るの？大きな不安だ。

JSOB の私には分かるが、地方に行くと、技術力の無い事務、特に総務や会計担当の人が、「下水道にしたいがどうしたらいいか分からないから JS をお願いします。」と言う感じ。そういう人が中心となり、「公共下水道」・「集落排水事業」・「コミュニティプラント」・「合併浄化槽」それぞれを、自治体の中に区分けして整備すると言う考え方が出来るのか？ はなはだ疑問だ。

この民主党の「事業仕分け」を私もテレビで見れていたが、一番傑作だったのは、文科省が進める、「世界最速コンピュータ」への討論。仕分け人は、必殺：蓮舫女史。そのやり取りを少し表記する。蓮舫氏「世界最速コンピュータの開発にこんなにお金がかかるのですか？」：文科省担当「はい。」：蓮舫氏「世界 1 位と 2 位とどういう差があるのですか？」：文科省担当黙ってしまった。のか、放映されなかった。その次のカットは蓮舫氏の勝ち誇ったような顔。「この人、分かってない！！」と思った。とにかく、「科学技術の発展について何も知らないで、自分の見栄（自己主張）の為だけに、カッコ良く事業仕分けをやっている。」と言う印象をものすごく強く感じた。

この事業仕分けが終わってから、同じく「子供未来科学館」館長の、元宇宙飛行士：毛利衛氏が、無然とした顔で、「科学の発展と言う事に関して何も考えていない。」とコメントしていた。

水倶楽部会員諸氏も、何とかしたいと思っているであろうが、現在日本は景気が悪い。でも、日本は、国力（外貨）を身に着けるには、高付加価値の製品を輸出して、世界の中でオンリーワンと言われる製品開発能力と技術を売りにしていくしかない。その技術と言うのは、現在では、ひとりの天才が現れて、ある日突然発現するのではなく、周辺の細かな技術を積み上げて総結集し、最適な組み合わせを行い、何度も試行錯誤してやっと出来ると言う事を「事業仕分け担当者」は分かっていない。

私は蓮舫氏に対して、この様に反論したい。「では、参加することに意義があるオリンピックで金メダルと、銀メダルの差はどういう差ですか？」

陸上の 100m 走、0.01 秒差も無い、写真判定で順位が決定する。でも、金メダルは厳然として金メダル、銀は銀。金メダリストと銀メダリスト。練習量、そのレースにかける意気込み、それまでに犠牲にした個人の欲望や時間。そういった物に大差があるとは思えない。まさに、両者

とも、わずか 10 秒弱の時間「一瞬」の世界に自分の全人生を賭けている。

それでも、金メダリストは世界最高峰、銀メダリストとはスポンサー等に大きな差がつく。

この駄文をここまで読んだ諸氏も、つい先頃行われた、バンクーバー五輪、女子フィギュアスケート個人戦で、浅田真央選手が流した涙を思い浮かべるであろう。

諸氏もご存知の通り、現在上下水道施設関係では、フランス系の会社、ヴェオリア社が台頭して来ている。植民地化作戦のごとく、地中海沿岸諸国や旧仏領インドシナを中心に、猛烈な勢いで事業展開している。

ヴェオリア社の強みは、計画から施設の建設、マネジメントまで、一貫して同じ会社が行っている事だ。したがって、施工後の維持管理段階で発生したトラブルは、次の施設の設計や計画に反映しやすいし、当該施設のトラブルも早急に解決を図ることが出来る。

日本の場合は、設計・計画はコンサルタント、躯体建設はゼネコン、処理設備はプラントメーカー、電気設備は電気設備会社。そして処理場完成後は地方自治体の選んだ、維持管理会社に運転を委託してしまっている。各段階で入札して、さまざまな会社を関与させる事は良いが、一貫性が無く、ある処理場のトラブルが次の処理場建設にほとんど反映されない。また、技術のフィードバックもほとんどなされていない。

このような状態では、「水処理」と言うキーワードで一貫性を持つヴェオリア社には到底勝てない。

中国やインドが安い労働力で、日用品や簡単な電気製品を中心に生産・輸出する事で、どんどん GDP を大きくし、世界経済の中に台頭してきている現在、技術に関しては、「世界大戦の時代」を迎えている。

太平洋戦争時、三菱が開発した「零戦」を中島飛行機が生産していた様に、企業間の枠を超えて、メイド・イン・ジャパン・スペシャルを開発・生産し、これを東アジアを初めとする、世界中でのグローバルステイタス・スタンダードとすべきなのだ。

その潜在的能力は日本の工業力は既に持っている。あとは国家戦略と言う、政治の問題だけなのだ。国会で「裏金を作った、貰った」等という、低次元の争いをしている場合ではないと思うのだが、政治家には、それが見えず、互いの足を引っ張る事しか考えていないようだ。

話がだいぶそれてしまったが、日本は、世界最先端の技術を開発し続けて、アジアのデファクトスタンダードが日本の製品と言われるまで、走り続けなければならない。なぜなら、日本には日本人しかおらず、天然資源も無く、食料の自給率も低いし、国防も半分は米国任せであるから。

終わりに、21世紀は「水の世紀」と言われる。世界中で汚れを「水に流し」て来たため、南極海に至るまで環境汚染が広がっている。今後予測される飲料水争奪の戦争を阻止するためにも、まず、我々が手始めに、「人が汚した水はキレイにしてから、自然に返す」技術を、積み上げ、磨き上げていかなければならない。そして、日本は水処理技術のトップランナーとなる事で、国力をつけ、「水環境のデファクトスタンダードは日本の環境基準」と言われるよう、互いに英知と経験・技術を結集させてゆくべきだ。それには、政府民主党の汚水処理の「事業仕分け」とは、異なる方向が必要だと思う。